

## 二度目の直島(2013/07/31)

右城 猛

### はじめに

福武書店二代目の社長 福武総一郎の構想で、瀬戸内の真珠と呼ばれていた直島のミュージアム化のプロジェクトが建築家 安藤忠雄に委ねられ、完成したのが平成 16 年である。

私が最初に直島を訪れたのは、その 2 年後の平成 18 年であった。本村の家プロジェクト(角屋、南寺、護王神社、きんぎ)、ベネッセハウス、地中美術館を見学してきた。

その後、平成 22 年に李禹煥(リ・ウファン)美術館、平成 25 年 3 月には ANDO MUSEUM が完成している。7 年前の記憶を蘇らせると共に、新しくできたミュージアムを鑑賞する目的で、再び直島を訪問することにした。

仕事をしているとなかなか時間がとれないものであるが、7 月 31 日に何とか自由になる時間をとることができた。

7 月 30 日(水)は、高松市で一日中、会議や打合せの予定が入っていた。8 月 1 日(金)には、9 時から 17 時まで牟礼の四国技術事務所で研修会の講師をすることになっていた。

30 日夜遅く高知に帰り、1 日の早朝に出発して高松に再度来るということも考えられたが、身体への負担が大きすぎる。30 日と 31 の二日間高松市に泊まり、31 日に直島を観光することにした。

### フェリーで直島へ

サンポート高松港より直島行き 8 時 12 分発のフェリーに乗る。所要時間は 50 分。平日であるにも関わらず客室は観光客でほぼ満員であった。夏休みのせいなのか、瀬戸内国際芸術祭 2013 が開催されているせいなのか、はたまたアベノミクスの影響なのだろうか。

宮浦港に着くと、テントウ虫のように黒い斑点がある「赤かぼちゃ」が出迎えてくれた。彫刻家であり画家、小説家でもある草間彌生(く

さま やよい、1929 年) の作品である。

タイミング良く 3 番乗車口から地中美術館行きの市営バスが出ていたのでそれに乗る。



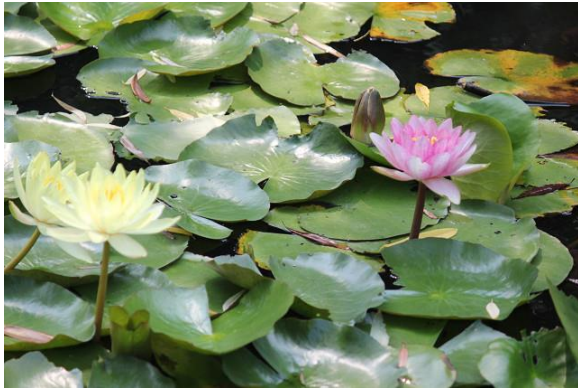
宮浦港にある草間彌生の作品「赤かぼちゃ」



9 時 30 分に地中美術館チケットセンターへ到着。ここでチケットの購入整理番号札を受け取って、9 時 45 分のチケット販売まで待つ。



チケットセンターから地中博物館までの道路脇には、きれいな花が植えられていた。

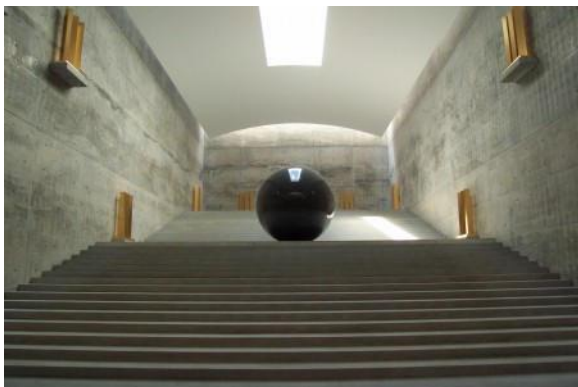


道路の左側には、「モネの庭」をイメージして造られた池があり、睡蓮が赤や黄色の花を咲かせていた。



地中美術館の入り口。10時の開門まで列になって待つ。今日の香川県は最高気温 36 度の猛暑日。湿度は 70%。蒸し暑い。

地中美術館の建物は、安藤忠雄の設計。この中にウォルター・デ・マリア、ジェームズ・タレル、クロード・モネの三人の作家の作品が展示されている。



マリアの作品は、階段状の神殿のような部屋に巨大な石の玉が置かれている。直径 2.2、重さ 14 トン、インド産の花崗岩(黒御影石)をドイツで球に加工し、ここに運搬してきて、部屋の天井を作る前に設置したようである。

タレルの作品は、「アフラム、パール・ブルー」、「オープン・フィールド」、「オープン・スカイ」の 3 つが展示されている。光を上手く利用した不思議な作品ばかりであった。

## 李禹煥美術館

国際的評価の高いアーティスト・李禹煥(リ・ウファン)と建築家・安藤忠雄のコラボレーションによる美術館。

安藤が設計した半地下構造の建物の中に、李の 70 年代から現在に到るまでの絵画・彫刻が展示されている。

「出会い間」には、「点より(1980)」、「点より(1976)」、「線より」、「風と共に」、「照応」、「対話」、「関係項」の 7 つの作品が展示されている。

その他にも「沈黙の間」、「影の間」、「瞑想の間」がある。沈黙の間は、部屋の真ん中に自然石が置かれ、壁に大きな鉄板が立て掛けられていた。影の間は、自然石の背後にできた影に映像を重ね合わせて写していた。瞑想の間は、壁や天井を真っ白く塗った部屋の壁に、作品を一点だけ展示していた。



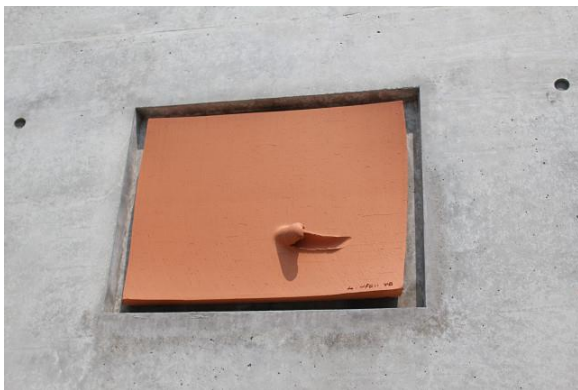
美術館への入り口「柱の広場」。自然石と鉄板が置かれ、高さ 18.5m の柱がそびえている。



美術館の前庭の自然石。右端に鉄板が少し見える。



美術館の入り口。いかにも安藤忠雄の作品らしいコンクリート打ちっ放しの壁。



壁に埋め込まれた鉄板の作品。



芝生の庭に造られたアート。自然石と鉄板が組み合わされている。

## ベネッセハウス

直島に最初にできたのが、ベネッセハウスミュージアム。

ネオンが点滅するブルース・ナウマンの作品「100 生きて死ぬ」、泥を壁に塗りたいリチャード・ロングの作品「瀬戸内海のエイヴォン川の泥の輪」と流木を床に置いただけの「瀬戸内海の流木の円」、柳幸典の「ザ・ワールド・フラッグ・アント・ファーム」など、これが本

当に芸術品だろうかと思うような理解に苦しむ作品が多い。

唯一、私が素晴らしいと感じたのは、柳幸典の「バンザイ・コーナー」だけであった。鏡張りの部屋の角を中心にたくさんの万歳をしたウルトラマンの人形が扇型に並べられているのである。それが壁面に張られた鏡に映って、人形が円形に並べられているように見えるのである。



白大理石を乱積みした壁のあるベネッセハウスミュージアムの入り口。



ミュージアムの下の道路脇に展示されたジョージ・リッキーの作品「三枚の正方形」。



ベネッセハウス別館宿泊専用棟「ビーチ」の前に置かれた椅子。



椅子を設置するだけでアートになっているが、その椅子に私が座ると、アートからはほど遠い現実的な風景になってしまう。



ベネッセハウス別館宿泊専用棟「ビーチ」の土産店の前に置かれたアート。ニキ・ド・ファールの「腰掛」



草間彌生の「南瓜」

## ANDO MYUSEUM



古い街並みが残る木村地区にできたミュージアム。築100年の民家の外観を残したまま、安藤忠雄独特のコンクリート打ちっ放しの空間が家の中に広がり、直島の一連のプロジェクトを含めた安藤忠雄のこれまでの取組を展示すると共に、直島の歴史についても紹介されている。



安藤ミュージアムの入り口。安藤忠雄も含めて工事に関わった150名の人々の名前が壁に書かれていた。

ミュージアムの中では、安藤忠雄の作品を紹介した本「安藤忠雄とその記憶」が売られていた。「ANDOの原点」と題する序文には、安藤忠雄自身により、幼少時代の思い出や生き様、若い人に対するメッセージが書かれていた。税込み2,800円と少し高いと思ったが購入することにした。

店員が、「安藤忠雄直筆のサインが書かれた色紙も付いていますよ。一つ一つ微妙に違ってきます。好きな柄を選んで下さい。色紙を剥がして額に入れることもできますよ」と話してくれた。その一言で、決して高くない。買って良かったと思った。